

# 俺たちの村のことは俺たちが決められる

## 全国に広がる「木の駅」

「こんな日にヤコタツに入って、まだぬるいなあ」なんちゃって、スウィッチを強に切り替えているのがオチさ」。愛知県東栄町の伊藤勝文さん（78歳）は、軽トラから荷下ろししながら昨年の自分を笑い飛ばす。伊藤さんたちのグループはこの日だけで軽トラ21台、約10tの材を木の駅に運んだ。

全国各地で木の駅プロジェクトが始まっている。「木の駅」は、不揃いの林地残材や間伐材を相場（1t2000～3000円）より少し高い価格（4000～6000円）で買い取り、大型スーパーでなく地域の商店だけで使える地域通貨で支払う仕組み。「軽

トラとチェーンソーで晩酌を」を合言葉に、あまり規格を気にせず

農産物を道の駅に気軽に出荷するように、気楽に山から木を出して、お小遣いにして森と地域を元気にしていこうというものだ。その運営は木の駅実行委員会のように中学校区ほどの単位で住民により自主的に組織される。その中で財政運営からルールなどすべてが議論・決定され、発生する逆ザヤ（過払い分）は寄付をはじめ助成金、森林環境税などの多様な手法で補填されている。

本誌2012年11月号で紹介されたように、木の駅は高知県仁淀川町での取り組みを原型に全国各地でも実施できるように標準化し、2009年岐阜県恵那市で始

まった。その後2010年には鳥

取県智頭町、2011年愛知県豊田市、岐阜県大垣市、高知県土佐町・大川村・本山町、2012年愛知県新城市、島根県吉賀町、茨城県常陸大宮市、岡山県津山市、愛知県東栄町、秋田県能代市、岐阜県郡上市、長野県辰野町などに瞬く間に広がった。

## 本気の地元山主3人とよそ者1人いれば始められる

「今まで見苦しいなあと思っていただけの切り捨ての木が100円玉に見え始めた。車で山道走ってもつい値踏みするようになった」「母ちゃんが急に優しくなった。弁当にお菓子とジュースもつけて、山に行つてこい、という」「土場



丹羽健司

1953年奈良県生まれ。信州大学卒業後、農業、農林水産省を経て、現在、NPO法人地域再生機構で木の駅アドバイザー。2005年から市民参加型の森林調査「森の健康診断」を愛知県で開始し、2007年から「山里聞き書き塾」、2009年から木の駅プロジェクト、2010年から「組手仕」による木育木装運動などを全国に普及している。矢作川水系森林ボランティア協議会代表、総務省地域再生マネージャー

に積んである木を見ると、頑張らなアカンと思うようになった。土場の名札、あれでつい頑張つてしまふ」「ひとりではきついで、みんなとならできる。飲み会が多くなった」「モリ券があるので近くの店に行つた。高くてまずいと



▲「木の駅」の開会式に30数台の軽トラが集合（2012/10/8、愛知県東栄町）  
 ▲土場で仲間と荷下ろしする伊藤さん（右から二人目）たち

思っていたらうまくいった。これからは行く」「1カ月で3カ月分売られた。いつも来ないお客さんが来てくれた。店を畳もうと思っていたけどもうちょっと頑張る」「モリ券があると、心が奮沢になってつい大買いしてしまう」……。そんな声が各地で聞かれるようになった。

「どうすればここで木の駅を立ち上げられるか?」。講演会などでもいつも尋ねられる。「本気の地元山主3人とよそ者1人いれば始められます」。いつもそう答えることにしている。そのよそ者は、固定しがちな山村の人間関係にずいぶん風を通してくれる。山の人のための集まりも商店だけの集まりも、

いつも暗く切ない話に終始する。しかし木の駅の会議では、それが化学反応を起こす。出荷のルール、地域通貨の扱い、大型店舗や町外資本店舗の選別などの議題を一つ一つ決めていく過程で何かが変わっていく。ひとり暮らしの高齢山主をどう支えるか、イターン若者の参加方法は、商工会に入っていない商店はどうする、これ以上村のお店を減らさないためには、村の温泉を薪ボイラーに変えたら……。

議論の中で、山主が商店やよそ者の行く末を、商店主が山のありようを、よそ者が村の未来を、互いに思いやり始める。そして、自治が始まる。俺たちの村のことは俺たちが決められるのだという実感が広がる。

◆ 「森は海を海は森を恋いながら 悠久よりの 愛紡ぎゆく 熊谷龍子」

あの「森は海の恋人」の原句だ。森が海を、海が森を恋うように、日本の小さな山里で山とお店とよそ者が心を寄せ合う営みが始まっている。

そんな各地の木の駅で化学反応を起こしている人々の息遣いを本稿で紹介していきたい。(つづく)



▲「木の駅」ののぼりが並ぶ東栄町商店街